



童話

水谷 年 惠

五〇

綺麗な着物

だん／＼寒くなつて來たので、兎がお爺さんに赤いあべゝを買つて貰ひました。それを着て、お山へ行くと、裸てゐた狐と狸が、大層うらやましがりました。

狐「兎さん、綺麗な着物だね、誰に買つて貰つたの。」

兎「お爺さんだよ」

狸「ちよつとの間貸してお呉れよ。」

兎「いやだよ、お爺さんに買つて貰つたらいい」

「おやあないか」

其處で、狐と狸は、二人でお爺さんの所へ行つて頼んで見ることにしました。

狐と狸「お爺さん、私達にも赤いあべゝを買つて下さい。」

お爺さん「だめ／＼、お前達は、畑を荒したり臺所の物を盗んだりして、いたづらばかりするんだもの、赤いあべゝなど買つてやられないよ。」

狐と狸は仕方がないので、めい／＼工夫して、綺麗な着物を着ることにしました。

狐は野菊の花を澤山摘んで、一花一花を、體中の毛に縛り附けました。薄紫色の野菊の花は、狐のみにくい體中を、大層美しく飾りました。狸は紅葉の葉をどつさり採つて、一葉一葉、糊で體中に貼着けました。赤々と、燃えるやうな色で包ま

れて、狸も大層美しく見えました。

二人お揃ひで、お爺さんの所へ行つて、見せびらかしました。野菊の花の着物と、紅葉の葉の着物、あまり美しかつたので、お爺さんも兎もびつくりしてしまいました。

狐と狸の美しい着物が、お山中の評判になりました。羊や、鹿や、猿や、色々の獣達が、大勢で見物に出掛けました。見ると、狐の野菊はもう花が凋んでしまつて、少しも美しくありません。狸の紅葉も、葉が枯れ枯れになつて、きたならしくなつてをりました。

猫が鉛筆に化けた噺

猫のタマが、花子さんの鉛筆にじやれて遊んでゐました。鉛筆はころころがつて、何處かへ行つてしまひました。花子さんは鉛筆を一本しか持つて居りませんでした。花子さんは、もう繪を書く事も、字を書く事も出来なくなりました。

猫のタマが、鉛筆に化けました。花子さんは、

「あつ、鉛筆が出て来たわ。」

と言つて喜びました。花子さんは、お帳面に繪を書いたり、字を書いたりしました。鉛筆の心が短くなつたので、削らうと思つて、花子さんが小刀で鉛筆の先を、一寸削りかけると、

「ニヤン」

と言つて、猫のタマが、花子さんの手から飛び出しました。

天人の笛

ある所にお爺さんがありました。ある日お爺さんが山へ柴刈りに行きました。すると山の中の椎の木の下で、子供の雷が晝寢をして居りました。

お爺さんは子供の雷が眼を覺さないやうに、そつと椎の木へ登りました。そして、椎の木の枝を振ると、椎の實が、ばら／＼／＼と降りかゝつて、子供の顔や體を打ちました。子供の雷はびつ

くりして、逃げ出しました。

お爺さんが木から下りて来て見ると、美事な笛が落ちてゐました。

「どんな音がするか、一つ吹いて見よう。」

と言つて、お爺さんが一吹き吹いて見ました。すると、今までじつとしてゐた大空の雲が、ふわふわと動き出して、お爺さんの前まで、下りて来ました。其の雲の中には、立派な腰掛が一つありました。

お爺さんが、其の腰掛に腰を掛けると、雲はすうつと、天へ舞上つて、お爺さんを空の國へ連れて行きました。空の國では、今大勢の天人が集まつて、不思議な、よい音楽を始めて居りました。どの天人も皆笛や太鼓や、色々の鳴物を持つて樂しさを鳴らして居りました。中にたつた一人、端の方に、何も持たずに、泣いてゐる天人がありました。お爺さんは、可哀想に思つて、其の天人

の側へ行つて、

「此の笛をお吹きなさい。」

と申しました。天人は其の笛を見ると、嬉しさにして、

「あゝ、これは私の笛です。あなたはどなたですか。」

とたづねました。お爺さんは、椎の木の下で其の笛を拾つた事や、笛を吹いたら雲が下りて来た事や、其の雲に乗つて来た事などを、天人に話しました。

天人は大層喜んで、

「お爺さんのお蔭で、私は空の國に何時までも住む事が出来ます。御恩は何時までも忘れません」と言つて、お爺さんを雲に乗せて、お爺さんのうちの前まで、送つて来て呉れました。

別れる時、天人はお爺さんにむかつて、

「お禮の印に、命の水を差上げませう。」

と言つて、一つの壺を呉れました。壺の中の水を
飲むと、お爺さんは忽ち若者になつてしまひまし
た。

其の時から、一つも年をとらずに、今でも其の
若者は生きてゐると言ふ事です。

A B C

ギーギー、グーグー、モウモウ、ガア

ーガアー

或朝、山羊と子豚がお家をこさへに出かけます
と途中で大きな牛に會ひました。

「お家を、立派なお家をこさへに行きますの」
と聲を揃へていひました。

「わたしも一緒に行きませう」

「オヤ、お手傳下さるの」

「大きな體でいたしませう」

「うれしいなあー さあ〜早く歩きませう」

ギーギー、グーグー、モウモウ三足揃つて皆で
お道をいそぎました、所が途中であすましやさん
の鷺鳥に會ひました。

「お家をこさへに行きますの」

ギーギー、グーグー、モウモウ、聲を揃へてい
ひました。

「あたいもお伴いたしませう」

と首を伸ばして申しました。

「なーがい首でいたしませう」

「これはうれしい！ 皆でいそぎませう」

ギーギー、グーグー、モウモウ、ガアーガアー
皆足取揃へて歩きました、ちつとも休まずわき目
もふらず一心不乱に歩きました、すると白い山羊
がいひました。

「こゝらでお家をこさへませう立派なお家をこさ
へませう。」